

---

# コナン×銀魂

うね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コナン×銀魂

### 【Nコード】

N8024U

### 【作者名】

うね

### 【あらすじ】

「どこだ・・・ここは？」目を覚ましたコナンの前に広がっていたのは江戸の町だった。突如「銀魂」の世界へやってきてしまったコナンはなんやかんや万事屋で居候をすることに。そしてそんな時にかぶき町では「人斬り」が現れて・・・？事件の謎（というほどの謎なんてないけれども）に今万事屋とコナンが迫る！！

タイトルのとおり銀魂とコナンのクロスオーバー作品です。読むときは注意書きを読んでくれるとありがたいです。

## 注意書き

この小説を読む時の注意点をいくつか。

- ・作者の自己満足小説。
- ・先の展開とか全く考えてない、書きながら考える。
- ・そのためかなりグダグダ。
- ・作者は馬鹿なので青山先生のようにトリックとか考えられない。
- ・だから事件もグダグダ。
- ・キャラ崩壊の恐れあり。
- ・残酷な描写がある・・・かもしれない。
- ・不定期更新。
- ・作者は案外多忙だったりするので更新がかなり遅れる場合も・・・。
- ・基本「銀魂」の世界をメインで進むので「名探偵コナン」のキャラはコナンしか出てこない。

以上のことをふまえて、それでも読んでくれる心の広い方はどうぞ！  
長々とすいませんでした。

**第1訓 始まりは突然（前書き）**

短いです。

## 第1訓 始まりは突然

「どこだ・・・ここは？」

驚愕の表情を浮かべて辺りを見渡している少年がいた。彼の名前は江戸川コナン。(みなさんご存知のことと思うが)彼はかの有名な高校生探偵、「工藤新一」が『A P T X 4 8 6 9』という不思議な薬によって幼児化した姿である。

彼が驚愕の表情を浮かべている理由はわずか1時間ほど前に遡る。

その日、コナンはいつもどおりに小学校から毛利探偵事務所に戻ってきたはずだった。蘭はまだ学校から帰ってきておらず、何故か小五郎も出かけており探偵事務所には誰もいなかった。

そして、特にすることもなかったので、コナンはそのまま誰もいない探偵事務所で寝てしまったのだ。それがちょうど1時間ほど前のこと。

いつもどおりの何の変哲もない日常。目を覚ましたら、いつもどおりの日常がまた繰り返し広げられる。

・・・のはずだったのに、

目を覚ました時、コナンの前に広がっていたのは

江戸の街だった。

## 第1訓 始まりは突然（後書き）

乱文& a m p・駄文失礼しました！

## 第2訓 出会は偶然（前書き）

のそりのそりと投稿。展開遅いうえに意味不明ですよね・・・ごめんなさい。そしてまたもや短い。



## 第2訓 出会いは偶然

(どこなんだここは・・・)

コナンが目を覚ましてから丸一日。コナンはもう何度目となる疑問を頭の中で繰り返していた。

目が覚めたとき、コナンの前に広がっていたのは江戸の街だった。いや、正確には江戸の街ではない。そこはコナンが知識として知っている江戸とは大きくかけ離れたものだったのだ。

空にはなにやら船のようなものが飛び交い、街には明らかに人間ではない、得体の知れない生き物が街を行き交っている。そう、まるで宇宙人のような何かが・・・。

(映画の撮影か何かか・・・?)

とりあえず冷静に今の状況を分析してみたが、ここが一体どこなのか全く分からない。目が覚めてからコナンは何か情報を求めて、一日中歩き回っているわけだ、が・・・。

状況は一向に好転しない。夢か?という考えも真っ先に考えたが、やけにリアルな夢だった。信じたくはないがどうやらこれは現実らしい。

(腹へったし・・・疲れたな・・・)

それもそのはず。丸一日何も飲まず食わずでただ歩き回っていたのだから。

まして今は「工藤新一」の姿ではない、「江戸川コナン」である。子どもの体力ではそろそろ限界がきてもおかしくはない。

(やべ・・・もう限界・・・)

くらつと目眩がしたと思った次の瞬間、コナンは地面に勢いよく倒れこんだ。そして、コナンの意識はそこで途絶えた！。

クウーン・・・

倒れたコナンを見下ろしている一つの影があった。

## 第2訓 出会いは偶然（後書き）

文章力欲しいです。切実に。

しかしコナン×銀魂って誰得って感じですよね……。誰か読んでくれる人いるのか？

### 第3訓 偶然は必然（前書き）

評価して下さった方本当にありがとうございます！こんなバカな小説を読んでくれる人がいると思うと涙が出るほど嬉しいです・・・。

相変わらず展開遅い上に駄文ですがよろしくお願いします！

追記・間違えました……。トイレトペーパーのくだり定春拾った時でしたね。でもめんどくさいんで直しませんごめんなさい！

### 第3訓 偶然は必然

「神楽ちゃん遅いですね・・・」

「そーだな」

場所は変わって万事屋。気だるげに会話をしているのはみんなご存知（ご存知じゃないかもしれないが）我らが『万事屋銀ちゃん』のオーナー、坂田銀時とツツコミ担当メガネである。

「あれ？ナレーション僕に対して扱いひどくない？」

「しっかし・・・トイレトペーパー買いに行くのにどんだけ時間かかってんだあいつ」

「あ・・・僕の発言は無視するんですね・・・」

神楽がトイレトペーパーを買いに出かけてからかれこれもう一時間間はたっていた。

「・・・ってか前にもこんな事ありませんでしたっけ？」

「・・・」

二人の脳裏に嫌な予感がよぎる。以前神楽におつかいを頼んだとき、神楽はトイレットペーパーロールだけを持って帰ってきたのだ。そう、何故か1ロールだけ。

「いや、でもさすがにあのバカも学習してんだろ……」

「そうですね……、前みたいに何かオマケもって帰ってきたりして」

苦笑しながらそう言う新八だが、目は全然笑ってなかったりする。新八のいう『オマケ』とは、以前神楽がトイレットペーパーと一緒に持ち帰ってきた『宇宙旅行券』のことである。まあ、そのせいでハイジャックに巻き込まれたり、銀時の旧友である坂本辰馬に再会したりといろいろあったのだが。

「おいおい……厄介事はごめんだぞ」

前回のことを思い出したのか、銀時はかなり嫌そうな顔でそう言った。

その時、

「ただいまヨー」

扉の開く音がし、神楽と定春が帰ってきた。

「あ、神楽ちゃんお帰り。トイレトペーパー買ってきてくれた？」

「ほい」

と言って神楽が新八に手渡したのは、やはり1ロールだけのトイレトペーパーだった。お約束といふかなんと言うか……。

「神楽ちゃんあのさ……普通トイレトペーパー買ってきてって言ったら何ロールが入ったの買ってくるんじゃないの？これじゃ誰がお腹壊しても対処できないよ」

「ガタガタうつさいアルナ、この小姑が。そんなんだからお前はいつまでたっても新八アルネ。お前は一生新八にはなれないアル。」

「んだとコラアアアアアツ！！！！！！新八という存在そのものを否定か貴様！！！！！」

いつものように口喧嘩を始める二人。まあ新八が神楽に勝てるわけもないので新八が一方的罵られていたのだが。

「おい神楽……それ、何だ？」

二人がギヤアギヤアと言いつ争っているのを静観していた銀時だった

が、ある物に気づき口を開いた。銀時の視線は定春の背中に向けられている。

定春の背中には何かが乗せられていた。何やら黒い物体が……。

「え？神楽ちゃん何それ？」

神楽と言い争っていた新八も定春の背中に目を向ける。

二人の脳裏に再び嫌な予感がよぎった。

「あ！これのことアルカ？」

神楽は何故か嬉しそうな顔で「それ」を手にとると、二人に自慢するかのように見せ付けてきた。

「さっき拾ったアル！！定春29号！！」

神楽が見せ付けてきた「それ」は

スヤスヤと眠っている、メガネをかけた小さな男の子だった。





### 第3訓 偶然は必然（後書き）

何か小説書くのって恥ずかしい気持ちになりますね……。そして  
今回も短いですね……。ごめんなさい。  
今回も駄文失礼しました！

#### 第4訓 出会は運命（前書き）

こんな自己満足な小説を読んでくれる方・・・本当にありがとうございます！  
ありがとうございます！そしてこれからも見捨てないでください！（土下座）  
今回も駄文な上に展開遅いです。

あ、あとサブタイトルは毎回適当なのであまり深く考えないでください。

## 第4訓 出会は運命

「さつき拾ったアル！定春29号！」

神樂が自慢するかのように見せ付けてきた「それ」は・・・

小さな男の子だった。

「いやいやいやいや・・・いやあああああああああー！！！！・・・」

「やあーぐらちやーん!？」

「『小さな男の子だった』……じゃねーよ!!お、おおお前何拾つてきてんだああああああ!!!!!!!!」

「何って……定春29号アル!定春が見つけたネ!」

「違う!それ定春29号違う!!早く元の所に戻して来い!お父さんとお母さんの所に戻してきなさい!」

「えーいやアル。定春29号はもう万事屋の子ネ」

ブツブツと文句を言う神楽。何も考えてなさそうな神楽に対し、二人はかなり取り乱していた。

「ど、どうすんですか銀さん!こ、これ……誘拐とかになるんじゃないんですか!」

「お……落ち着くんだ新八君。とりあえず落ち着いてタイムマシンを探せ」

そう言う銀時の声は震えており、何故かダンスの引き出しを開けてタイムマシンを探していた。

「いや、あんたが一番落ち着けええええ!!!!!!」

銀魂読者ならご存知だろう。銀さんは困ったらとりあえずタイムマシーンを探すのだ！

「……でもこの子万事屋の前で倒れてたアルヨ？」

「「え？」」

神楽の言葉にピタッと二人の動きが止まる。

「……それってもしかして定春の時と同じなんじゃないですか？  
もしかしてこの子捨て子なんじゃ……」

「……要するに、万事屋だからって何でもしてくれると思ったバカが捨てていったってか？あのなあ……万事屋つたってボラントイアじゃねーんだぞ」

ガシガシと頭をかきながら心底めんどくさそうに銀時は言った。

「銀ちゃん！それでも銀ちゃんは元の所に戻して来いって言うアルカ！万事屋の前に転がしとけって言うアルカ！！」

神楽は少し芝居がかった口調でそう叫んだ。目にはうつすらと涙も浮かべている。

「うつ・・・」

これにはさすがに銀時も言葉をつまらせ顔をひきずらせる。

「確かに・・・捨て子となれば話は別ですよ。どうすんですか銀さん？また捨ててくるんですか？」

子供たち二人に攻めるような目で見られた銀時は何か言い換えそうとしたが、二人の視線に負け（？）半ばヤケクソ気味に叫んだ。

「あー分かったよ！！そのガキをココに置けばいいんだろう！？しやーねからしばらくは万事屋においといてやるよ！！」

「本当アルカ！？ありがと銀ちゃん！！」

銀時の言葉を聞いた神楽は、さっきまでの泣き顔が嘘のように、満面の笑みで銀時に抱きついた。

「え？神楽ちゃん？君さつきまで泣いてたよね？え？……」  
嘘泣きかコノヤロオオオオオ！！！！」

「あんなのに騙される銀ちゃんが悪いネ」

「んだとコラアアアアア！！！！」

ギヤアギヤアといつものように壮絶なケンカを繰り広げ始める二人。一方、勝手に捨て子にされたコナンはまだスヤスヤと気持ちよさそうに眠っている。

（とりあえず、この子が目を覚ましたらいろいろ話を聞かないとな  
……）

二人がケンカをしている光景を半ば呆れたように眺めながら、新八は一人ボーと考えていた。





#### 第4訓 出会は運命（後書き）

書きながら展開考えるのって難しいですね。

銀魂の二次小説書いてる人ってみんなクオリティ高すぎじゃないですか？その文章力と構成力を私にください……。  
今回も駄文失礼しました！！

## 第5訓 疑惑は確証（前書き）

しつこいですがサブタイトルはすつこい適当です。いつも5秒くらいで考えてます。意味不明のサブタイトルですけど気にしないでください。

今回は・・・一人称コナン君？

## 第5訓 疑惑は確証

目が覚めた時、コナンの前に広がっていたのは

大きな白い犬だった。

「……って、うわあ!!」

思わず大声を上げて飛び起きるコナン。寝ているコナンを大きくて白い犬、万事屋のペット定春が覗き込んでいたのだ。

(いやいや……大きいなんてレベルじゃないだろこれは……。  
本当に犬か?)

「お、起きたか？」

ふと隣から聞き覚えのない声が聞こえてきた。そちらの方向へ顔を向けると、一人の男がソファに座り、何ともダルそうにジャンプを読んでいた。銀髪に天然パーマ、死んだ魚のような目をしたその男は、どこか不思議な雰囲気醸し出している。

「えつと・・・」

どうやらソファに寝らされていたらしいコナンは体を起こし、キョロキョロと周りを見渡した。

見覚えのない場所、

見覚えのない人物、

そして、とても犬とは思えない巨大生物。

コナンの中にあつた疑惑は、確信に変わった。

(ここはやっぱり・・・)

「あー！！銀ちゃんその子起きたアルカ！！」

突然扉が開けられ、少女が小走りで部屋へ入ってきた。その後ろからは、買い物袋を持ったメガネの少年が続いて部屋へ入ってくる。その少女は異国の人を思わせる鮮やかなオレンジ色の髪、くりつとした丸く青い目、そしてなぜかチャイナ服を身に着けていた。後ろにいるメガネの少年は・・・まあ、どこにでもいるごくごく普通のありふれた少年だ。メガネ以外これといった特徴もない。(ひでえ)

「いつの間に来たアルカ。ズルイネ銀ちゃん」

「いやいや何がズルイんだよ。ついさっき、お前らが買い物に行ってる間に起きたんです」

どうでもいいことだが、一応言っておくと新八と神楽はトイレトペーパーを買いなおしに行っていたのだ。(第3訓参照)

「そっぴゃあ自己紹介がまだだったな」

自分たちをボーと見上げているコナンに気づき、銀時はジャンプを横に置いてコナンに向き直った。

「俺あ坂田銀時、万事屋銀ちゃんのオーナーだ」

そこでくるつと向き直り、新八と神楽を指差しながら従業員二名を紹介した。

「んで、この二人が従業員。こっちの冴えないメガネがツッコミ担当志村新八。こっちの大食い胃拡張娘が神楽。あ、あとこのでっかいのはペットの定春だ」

誰が冴えないメガネだコラ。銀ちゃん私そんなに大食いじゃないネかよわい女の子アル。

と、何やら二人の講義の声が聞こえるが銀時はさらっと無視。

「お前は？」

「あ……えっと、僕の名前は江戸川コナン」

「コナン……？変わった名前だな」

銀時が怪訝そうに眉をよせる。

「本当、変な名前アルナ」

「ちよっ、神楽ちゃん！人の名前変とか言っちゃだめだよ！」

「ははっ……」

思わず苦笑するコナン。

（悪かったな、変な名前で）

まあ、変な名前だと笑われるのはいつものことだ。今更気にしたって仕方ない。

「んで？何でお前は万事屋の前なんか倒れてたんだ？」

(そうか・・・俺倒れたんだっけ・・・)

ボーっと考え込んでいるコナンの顔を、万事屋三人が不思議そうに覗き込んでくる。

しばらくの沈黙の後、コナンはゆっくりと口を開いた。

「えっと・・・僕の話、聞いてくれる？」

笑われるかもしれない、それにきくと信じてはくれないだろう。自分だってまだ半信半疑なのだから。

そう思ったが、コナンは目の前にいる三人に本当のことを話すことにした。

『自分は異世界からきた』、などというバカげた話を。



## 第5訓 疑惑は確証（後書き）

相変わらず意味分かんない文章だなあ〜・・・  
文章力ほしいです・・・。今回も駄文失礼しました！

## 第6訓 事実は事実（前書き）

自分の文章力と語彙力のなさが恨めしい今日この頃。

## 第6訓 事実は事実

どうやら自分は異世界に来たみたいだ、それ以外に考えられなかった。

最初は「タイムスリップ」なんて考えも浮んだがどうやらそれは違うらしい。

タイムスリップの方がまだマシだったかもしれない。

ここは明らかに普通の江戸の街ではない。

信じたくはないが、自分は本当に異世界に来てしまったようだ。自分たちの世界とは違う、遠い世界に。

\*\*\*\*\*

「つまりお前は異世界から来た……と？」

「う、うん……」

ここは万事屋。万事屋メンバー三人とコナンが向かい合うようにソファに座っている。

たった今、コナンは全てを話し終えたところだ。

自分はこの世界の住人ではないということ、

自分の住んでいる世界のこと、

そして気がついたらここにいたということ、

勿論、『江戸川コナン』は本当の姿ではなく、『工藤新一』が本当の姿であるということを除いて、コナンはできるだけ分かりやすく、自分の知りうる全てのことを説明した。

それを聞いた万事屋メンバーの反応は……

「いやいやいや、いくらなんでもそれはないアル。大人をからかつちや駄目アルヨぼく」

「あはは……SF映画の見すぎだよ」

全くコナンの話を信じていなかった。

神楽と新八がバカにしたような、呆れたような口調でコナンをからかう。ただ、銀時だけは何かを考えているのか、じっと押し黙ってコナンを見ていた。

「あはは……」

(まあそりゃそうだよな……)

いきなりこんな話をされて信じる方がどうかしてる。まして、今コナンは子どもの姿だ。工藤新一の姿ならまだしも、こんな子どもの言うことを信じる者はまずいないだろう。笑われるか、呆れられて軽くあしらわれるのがオチだ。

「信じてやるよ、その話」

「「「え?」「」」

不意に聞こえた言葉は、ずっと黙っていた銀時から発せられたものだった。

銀時の言葉に驚いたのか、彼の両脇に座っている二人は目を丸くして彼を見上げている。

コナンもまた、驚いた様子で銀時を見ていた。

「どうして……?」

あまりにも予想外だったのだ。だからつい、聞き返してしまった。

コナンの質問に少し考えた素振りを見せた銀時だったがすぐにこう答えた。

「あー……まあ、何というか……勘だ」

「「「はあ?」「」」

何とまあ適当な答えに三人が三人、思わず間抜けな声を出してしまった。

「え、勘って銀さんアンタ……」

「銀ちゃんどうしたアルカ？とうとう頭いかれたアルカ？」

「ばっか！ちげーよ！俺の勘結構当たんだからな、なめんじゃねーぞー！」

それに、銀時は言葉を区切った。そこでコナンの目を見つめてこう言った。

「オメエが嘘をついてるようには見えねえしな」

コナンは少し驚いた。そんな事を言われるとは思ってもなかったのだ。いつものように、軽くあしらわれるものだと思っていた。

「まあ、銀ちゃんがそう言うなら仕方ないアル。私も信じてやるネ」

「そうですね………銀さんがそう言うなら」

さっきまでコナンをからかっていた二人も銀時の言葉を聞き、コナンの話を信じることにしたようだ。とりあえずは、だが。

「で？お前の話だと帰り方が分からねーってみたいだけどうすんだ？」

「そんなの万事屋に泊まつたらいいネ!!」

元氣よく神樂が提案する。

「まあ、確かにそれが一番ですよね……僕の家はアレですし……」

「ああ……アレな」

二人の脳裏に浮ぶのは新八の姉、志村妙。彼女自身に問題はないのだが（え？）彼女の料理はもはや殺人兵器だ。こんな小さな子どもを命の危険に晒す訳にはいけない。

「？」

暗い表情で何かを考え込んでいる二人を見て、コナンは頭の上にくエスチョンマークを浮かべている。

「しゃーねーな……帰れるまで万事屋に置いてやるよ」

はぁーとため息をつくとき、いかにも渋々といった感じで銀時はそう言った。一方神樂は、銀時の言葉を聞いて目をキラキラと輝かせて

喜んでいる。

「えっと……よろしくお願いします」

こうして、なんやかんやで万事屋に居候することが決定したコナン。

万事屋三人とコナンの奇妙な共同生活が始まる。

(ははっ……俺はどの世界でも居候だな)

一人静かに苦笑いを浮かべるコナンであった。



## 第6訓 事実は事実（後書き）

夏休み中はとてつもなく忙しいのであんまり投稿できないと思います。

すみません……………。

そして今回も駄文失礼しました！

## 第7訓 依頼は突然（前書き）

かなり短いです。そして急に時間が飛びます。

あと、忘れてましたがこの作品にはオリキャラが出ます。出さないようにしようと思ったんですが話の都合上どうしても。オリキャラが苦手な方もいると思いますが申し訳ないです……。

本当やる事が多すぎて投稿する暇がない（泣）

## 第7訓 依頼は突然

コナンが万事屋で居候生活を始めて三日がたっていた。  
ここでの生活にも大分慣れてきた頃だ。

とりあえず、この三日間で分かったことが一つある。それは、万事屋という職業は全く儲かっていないということだ。万事屋なんていかがわしい職業が儲かっているとは到底思えなかったが、さすがにここまでとはびっくりだった。この三日間依頼は0。収入は全くない上、神楽や定春の食費もバカにならない。一体どうやって生計を立てているのかと不安になるほどだ。

(こんなんで大丈夫なのかね……)

コナンがこの世界に来て四日目、この日も万事屋はいつものようにダラダラと過ごしていた。

平日の昼間から働かずにダラダラとジャンプを読んでいる銀時の姿を見ていると、平日に昼間から競馬に行っているおっちゃんの方がまだマシに思えてくる。

……いや、どっちもどっちか。

今日もこのまま何事もなく過ぎていくんだろうなあー、とコナンがぼーと考えていた時、

『ピンポン』

インターホンの音が万事屋に響いた。

「あん？ババアか？新八イー、俺ならいないって言っとけ」

「いや、お登勢さんじゃないでしょ。昨日珍しく家賃払ったじゃないですか。……………まあほほ恐喝でしたけど」

「グダグダ言っていないで早く行って来いよ新八。雑用しか能のない駄目鏡が。」

「んだとこのアマア！……！」

いつものようにギヤアギヤアと口喧嘩をしながらも新八は玄関に向かう。

うん、ちゃんと雑用の習性が身についてるようだ、さすが新八。

「はあーい、どなたですかー？」

ガラガラと新八がドアを開けた向こうには、神楽と同じくらいか、それより少し上くらいの少女が立っていた。

「えっと……何かご用ですか？」

新八のその質問に少し戸惑うそぶりを見せた少女だったが、ゆっくりと、少し遠慮がちに口を開いた。

「あの、依頼をお願いしたいんですけど……」

コナンがこの世界に来て四日目、初めての依頼が万事屋に舞い込んできた。

## 第7訓 依頼は突然（後書き）

いろいろツツコミどころ満載のおかしい文ですみません!!

今回も駄文失礼しました。

## 第8訓 事件は物騒（前書き）

展開が急・・・かもしれない。

依頼者の少女は個人的に六角編の霧江ちゃんみたいなイメージです。まあ、好きに想像しちゃってください。

相変わらずむちゃくちゃな文章ですがどうぞ！

## 第8訓 事件は物騒

探偵事務所みたいだなあー、とコナンはぼんやり考えていた。

今、万事屋では先ほど訪問してきた少女と万事屋メンバー三人がソファに座って向かい合っている。

依頼者がやってきて、話を聞いている様子はどこか毛利探偵事務所を思わせた。金さえくれれば何でもやるというこの万事屋は、あの毛利探偵事務所と何か通じるところがあるのかもしれない。

「人探し？」

少女の依頼内容は人探しだった。

銀時はめんどくささを隠そうともせずになるそうな声を出す。

「んで？どこのどいつを探してほしいんだ？」

「人斬りです」

「は？」

少女の口から出たのは、何やら物騒な言葉だった。

「知らないんですか？最近、巷で辻斬りが横行してるじゃないです



か

「あ……あーそんな話もあったような……」

「テレビは今その話で持ちきりですよ？」

「いや、この人結野アナのお天気予報しか見ないんで」

と、隣に座っていた新八が銀時を指差して言う。

それを聞いた依頼者の少女は少し呆れたような顔をして、渋々といった感じで仕方なく説明した。

「今月に入ってももう五人もの人間が殺されているんです、男女関係なく無差別に……。出会った人はみんな殺されてしまって、顔を見た人もいないので警察も手を焼いていると聞きました。」

「ふーん」

と、いつもの何を考えているか分からない表情でつまらなさそうに銀時は言った。もしかしたら、本当に何も考えていないのかもしれない。

「でも、何で僕たちなんですか？そんなの警察に任せた方がいいんじゃない……」

新八が至極まっとうな意見を口にする。  
だが、少女はまっすぐに新八を見つめると、キツパリとした口調で  
こう答えた。

「だって、それじゃ私のところにはこないじゃないですか」

「はい？」

「私はその人をただ捕まえるだけじゃなく、私の元に差し出してほ  
しいんです」

「えっと………どうしてですか？」

新八が問うと、少女は少し俯いた。彼女は両手を固く握り締め、ま  
るで何かに耐えているかのように体を震わせていた。そして、ゆっ  
くりと口を開く。

「復讐よ」

ぽつり、と彼女が漏らした言葉に、重苦しい沈黙が広がった。

「私の父は、その人斬りに殺されたんです………。何の罪もない父を、あの男は斬り捨てたんです！だから……、だから私、あの男を同じ目に遭わさないと気がすまない。私が、この手で殺してやらないと……。」

そう言い放った彼女の目は、怒り、憎しみ、悲しみ、そんなたくさんの感情で支配されていた。

コナンはこの目を知っている。コナンは今まで、幾度となく復讐に駆られた者の姿を目にしてきた。

殺された恋人の、親の仇、そうやって人を殺す者の姿を！。

だが、復讐に駆られた者の末路は、みな哀れなものだった。

コナンは誰よりもそれを知っている。だからこそ、憎しみに染まっている彼女の姿を何とも言えない複雑な気持ちで見ている。

「悪いがその依頼は引き受けられねーな」

重苦しい沈黙を破ったのは、やはり銀時だった。

「そんな……どうしてですか！お金ならいくらでも払いますから……。」

「どうしてってお前……。当たり前だろ。人殺しに加担する訳じゃいかねーよ」

「……………」

おそらく自分でも分かっているだろう。

少女は銀時の言葉に何も言い返すことができず、悔しそうに唇をかんだ。

「だが、」

と、銀時はそんな少女を見て言葉を続ける。

「その人斬りをボコボコにぶちのめした上でお前に差し出し、お前がそいつを一発ぶん殴るっつう依頼ならいつでも引き受けてやるぜ」

51

そう言ってニツと口角を上げ銀時は不敵に笑った。

その言葉に少女は少し驚いたように顔を上げ銀時を見つめる。

新八と神楽は顔を輝かせ、嬉しそうに笑っていた。

しばらく呆然としていた少女だったが、銀時の言葉にわずかに微笑むと、どこか嬉しそうな口調でこう言った。

「……………」  
「どうか、お願いします」

それを聞いた銀時は満足そうに微笑んだ。

## 第8訓 事件は物騒（後書き）

急に人斬りとか言われても意味分かんないですよね、ごめんなさい。でも自己満足小説なので許してください。

コナンと神楽ちゃんと定春が空気だけど気にしたら負けです！

今回も駄文失礼しました。そして、いつもこんな小説を読んでくれる方、本当にありがとうございます。感想、評価等、本当に嬉しいです、励みになります。これからもどうぞよろしくお願いします。

## 第9訓 脇役は悲慘（前書き）

万事屋もコナン君も出ません。その上短いです。

意味が分からない内容になっているかもしれないませんが読む順番は間違ってますので！

いつも以上にムチャクチャな文章ですが、どうぞ。

## 第9訓 脇役は悲惨

月明かりだけが照らす、人気のない路地を二人の人間が歩いていた。真っ黒な服に身を包んだ二人はどうやら真選組隊士らしい。今は巡回中のようだ。

「しかし副長も人使いが荒いよな・・・こんな深夜まで巡回なんてさ、俺二日連続で徹夜だぜ」

「まあ、今人斬りの件でピリピリしてるからな。・・・それに、鬼の副長つぶりは今に始まったことじゃないだろ」

ブツブツと愚痴をこぼしながら歩いている二人。ふと、その二人の前に一つの人影が現れた。

「「?」「」

急に目の前に現れた人物に、自然と二人の足が止まる。

「何者だ貴様？」

隊士の一人が少し怒気を込めた口調で問うが、目の前の人物は何も



答えない。

その人物は笠を目深に被っており、その表情は何えない。何をしてもなく、ただ二人の眼前に立ちふさがっている。

「おい、貴様一体何を……」

不審に思った隊士の一人がそう問いかけながら一歩足を踏み出した、その瞬間、

その人物は急にニヤリと笑ったかと思うと、腰に差してある刀に手をかけた。

そして――

\*\*\*\*\*

気がつくくと、隊士二人は地面に倒れていた。

一人は腹から大量の血を流しており、もう既に息絶えていることが分かる。

もう一人は大量に血を流してはいるが、まだ息があるらしく、苦し

そうにもがいていた。

血で染まった刀を片手に、その男は一人、血溜まりの中に佇んでいた。

先ほどまで被っていた笠は地に落ちており、今はその顔があらわになっている。

そして、今なおもがいている隊士に止めを刺そうと、その男は刀を大きく振り上げた。

だが、途中で気が変わったのか、急に刀を下ろすと倒れている隊士の前にかがみこんだ。

それから、今気づいたとでも言うようにゆっくりと口を開いた。

「お前、幕府の狗か」

倒れている隊士は力の限りに目の前の男を睨む。だが、男はそんなことは全く意にも介さずそのまま言葉を続ける。

「ふん、ちようどいい。お前らの上司に伝える。……『捕まえられるものなら捕まえてみる……この白夜叉を』と」

―その男、真っ白な髪を血に染め、

―凄惨に笑い、月明かりに照らされた姿はまさしく夜叉、

―『白夜叉』

## 第9訓 脇役は悲惨（後書き）

ベツタベタな展開でごめんなさい。

作者はシリアスが大好き・・・というかギャグが全く書けないのでこれからシリアスが多めになっていくと思います。

これからさらにグダグダになっていくと思いますが、これからもど  
うかよろしくお願いします。

今回も駄文失礼しました。

## 第10訓 報告は正確（前書き）

今回も万事屋&amp;コンナン君はいつさい出ません。  
まったくクロスオーバーっぽくない・・・。

相変わらずめっちゃくちゃな文章ですがどうぞ。

## 第10訓 報告は正確

今、真選組内は何やらピリピリとした空気に包まれていた。

先日、真選組隊士二名が人斬りに襲われ、内一名が死亡してしまっただのだ。

あの『チンピラ警察』と呼ばれ、恐れられている武装警察真選組、その隊士がこつもあつさりやられてしまうとは、何とも情けない話ではないか。市民からは非難の声が上がり、今、真選組はその人斬りを捕まえようと躍起になっている。

だが、人斬りの情報はなかなか手に入らない。襲われた隊士1名はかなりの重症でまだ意識を取り戻しておらず、話を聞くこともできない。その隊士が目を覚ますまで打つ手がない、というのが今の真選組の現状である。

そんなピリピリとした空気の中、イライラしているのは彼もまた例外ではなく……………

「チツ……………」

鬼の副長こと、土方十四郎はかなりイラついた様子で、自室で一人タバコをふかしていた。

人斬りの情報は一切入ってこない、真選組の評判は順調に下がっていく。



屯所内に凄まじい爆発音が響き渡った。

「土方さん、生きてやすかー？」

間延びした口調でどこか気だるげに問うのは、生粋のドS、一番隊隊長、沖田総悟。

「総悟、てめえ……………」

ふと、モクモクと煙が立ち上がる部屋から怒気を含んだ声が聞こえてきた。言うまでもないが、先ほど爆撃を受けた土方である。あの爆撃の中無傷ですんだのはさすがというか、何というか……………。

「何だ、生きてたんですかい。しぶといですね……………」  
「チッ」

「チッ、じゃねーよ……………何のつもりだてめえ……………」





山崎の言葉を聞き、土方の顔つきが変わった。沖田も土方と喧嘩していた手を止め、興味深げに二人のやり取りを見守っている。

「話は聞けたのか？」

「はい、それがですね、何だか気になることを言ってます……」

「何だ？」

「何でも、その人斬りが自分のことを『白夜叉』と名乗ったそうなんです」

「『白夜叉』……？」

聞きなれない言葉に、土方は怪訝そうに眉を寄せる。

(どこかで聞いたことあるような……)

しばし考えてみたがその答えは見つからない。土方はチツ、と苛立たしげに舌打ちをすると考えることを止め、山崎に言い放った。

「とりあえず俺もそいつに話を聞く。山崎、行くぞ！」

「あ、はい！」

少し急いた歩調で去ってゆく二人。後には沖田一人が残された。

(『白夜叉』、ねえ……………)

一人残された沖田は、先ほど山崎の口から伝えられた言葉を心の中で反芻する。  
そして、考える。

『白夜叉』という言葉の意味を――。

## 第10訓 報告は正確（後書き）

山崎の扱いが酷いですが私は山崎大好きですので！

これから更に亀更新になっていくと思いますが、次回も読んでいただけたら幸せです。今回もお読み下さり、ありがとうございます！

駄文失礼しました。

## 第11訓 子供は卑怯（前書き）

かなーり更新が遅れてしまって申し訳ありません。「誰も待ってねーよ」ってつっこまれそうですが、ビクビクしながらの更新です。更新遅れた上に短いですがどうぞ。

## 第11訓 子供は卑怯

「よし！じゃあさっそく調査に行くアル！！」

再び場所は変わって万事屋。依頼者の少女が帰った後、神楽はさっそく調査に行こうと声高らかに宣言した。

「それはいいけど……コナン君どうする？」

新八の言葉を聞き、神楽は「あ」と小さく声を上げる。

人斬りの調査などという危険な仕事にこんな小さな子どもを同行させるのはいかなものか、新八はそう考えたのだ。

神楽も新八の考えが分かったらしく、むーとうなっている。

（万事屋で留守番させるわけにもいかないし、お登勢さんのところに預けたほうがいいのか……。）

「ねえ、新八にーちゃん。」

新八がこれからどうするべきか考えていると、横からコナンがやや控えめな口調で口を挟んできた。

「僕も一緒に調査に行っちゃだめかな？」

「ええ！！コナン君も一緒に！？」

コナンからの意外な提案にうろたえる新八。さすがに危ないから、と断ろうとしたのだがコナンはそれでも調査に行きたいと訴えてくる。事件が目の前に転がっているというのに、コナンが黙っていられるわけがないのだ。

「どうしてもだめ……？」

少しうつと目を潤ませ、上目遣いで新八を見上げてくるコナン。そんなコナンのしぐさに新八は思わず「うっ」と言葉をつまらせた。

（え、何これ何この気分。何かすごく悪いことした気分なんですけど僕が悪いの？僕が悪いのか！？）

「まあまあ、いいじゃねーかぱっつあん。」

新八が一人良心の呵責に苛まされていると頭上からのんきな声が聞こえてきた。言わずもがな、銀時である。相変わらず何を考えているのか分からない表情で気だるげに口を開く。

「別にこいつも連れてきやいいじゃん。本人が行きたいって言うてんだし、かまやしねーよ。」

「いや、でも……。」

「それにこいつ、多分ぱつつあんより役に立つね。」

「あ、そうですか……。」

一人ウンウンと頷いている銀時と、笑顔で顔を引きつらせる新八。一瞬、新八の顔に怒りマークが見えたような気がしたか気のせいだろう。

「でもこの服で行くアルカ？目立つアルヨ？」

言われて新八と銀時はコナンの服装に目をやる。  
神楽が言えた義理ではないが、コナンの服装はかなり目立っていた。コナンにとっては「いつもの服」なのだが、コナンのような服を着て街を歩いている人間はほぼゼロに等しいだろう。少なくとも、調査には向いてない服装だ。

「うーん……どうすっかなー。子どもの服なんて持ってねーし。買う金もないし。」

「じゃあ僕が小さい頃の服使います？多分まだ置いてあると思うの



で……。」

「あ、それもそうだな。」

当のコナンを放って勝手に話が進んでいくがどうやら新八の服を借りることになったらしい。

新八は「じゃ、姉上にも電話で伝えときます。」と言って電話に向かって行った。

(お姉さんいるんだ……どんな人なんだろう。)

その言葉を聞いてコナンはのんきにそう考えていた。

横で銀時が「姉上」という言葉を聞いて若干顔をしかめたのにも気づかずに。

## 第11訓 子供は卑怯（後書き）

今回はお妙さんが出る……はずです。

今回も駄文失礼しました！更新はかなり遅いですが次回も読んでいただけたら幸せです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8024u/>

---

コナン×銀魂

2011年10月20日17時14分発行